

令和3年度 三重短期大学 一般選抜（法経科第2部）
入学試験問題（小論文） 解答例

問題一（120字以内）

解答例

民主主義の核心とは、主権者は自分の運命を自分で決めることのできる、他人に譲り渡すことのできない至高の権利の保持者であるということ、間違える権利もあるがだからこそその結果を引き受ける責任もあり、自分の運命を他人任せにしないということ。（115文字）

問題二（400字以内）

解答例1

筆者の見解が理解でき、その通りだと思った。民主主義というものはテマヒマをかけて決定が行われる経験を積み重ねないと身につかないと思う。18歳になって選挙権を得たからといって突然身につかない。そう考えると今の学校に民主主義はあったらどうか。今の社会に本当の民主主義はあるのだろうか。学校においてもルールがあったが皆で決めたとは言い難い。みんなで何かを決めたときに多数決を行ったこともあったが、それだけで良かったのだろうか。違う意見や少数派の意見に耳を傾けてきたらどうか。十分に話し合い、話し合いの前後で、相手と自分の意見が変わることがあったらどうか。

大事なことは、異なる意見や少数派、当たり前になっている規範や習俗など、お互いが改めて納得のいく話し合いを行うことだ。学校や社会においても安易に多数決で決めるのではなく、全ての人、全てことを納得するまで話し合える機会を十分に設けることが必要だ。（文字数 392文字）

解答例2

筆者の見解は理解できるが、現実的には仕方がないところがあると思う。確かに、民主主義はテマヒマをかけて決定が行われるものだと思うが、現実の社会は物事の決定にテマヒマをかけて行っている余裕はない。形ばかりの議論の後、多数決で決められることが多い。ましてや筆者も指摘しているように、私たちのほとんどが勤める企業に真の民主主義はない。指揮命令系統のもとで日々の仕事が行われているのがほとんどである。

時間に限りがある社会では、違う意見や少数派の意見に耳を傾け、十分に話し合い、話し合いの前後で、相手と自分の意見が変わるなど、ある程度の議論の後には、多数決を行うしかないのが現実である。その多数決の決定には、違う意見の人も従わなければならない。そうしなければ何も決まらないし何も行えない。よって、現実には多数決の手続きは必要であり、少数意見を大事にしながらか、多数決の決定を行うことが重要だと考える。（文字数 392文字）